千葉市美術館
アーティストプロジェクト
報告書

つくりかけラボ14
荒井恵子
和紙のフトコロ　墨のダイゴミ

会期
2024年
2月14日［水］―5月26日［日］

アーティスト
荒井恵子

テーマ
素材にふれる

概要
つくりかけラボとは、「五感でたのしむ」「素材にふれる」「コミュニケーションがはじまる」いずれかのテーマに沿った公開制作やワークショップを通して空間を作り上げていく、参加・体験型のアーティストプロジェクトです。
14回目となる今回は、船橋を拠点に活動する美術家の荒井恵子さんをお迎えし、荒井さんが制作のパートナーとする和紙と墨という二つの素材を、様々な切り口から味わい、その魅力を体感するプロジェクトとなりました。

「和紙」と「墨」に触れる空間

日本の伝統的な和紙と墨の世界を障子のある空間で体感してください。その空間は、世代の違いで懐かしくもあり、新しくもあるかもしれません。変化が激しい今の社会で、時間をゆっくり感じるひと時を和紙や墨に触れながら過ごしてみてください。それは私がいつもアトリエで制作しながら感じている魅力ある時間と同じです。和紙のある空間はどことなく優しく、その光も柔らかで、落ち着きます。かつて日本家屋に襖や障子として使用していた和紙も今では当たり前ではなくなっています。制作にあたり和紙や墨は私にとって大切なパートナーです。それらを深く知ることから、表現が始まっていると感じています。和紙の特徴も墨の魅力も味わえる空間にどうぞ遊びにいらしてください。

荒井恵子

和紙のフトコロ 墨のダイゴミ

つくりかけラボ

「和紙」と「墨」に触れる空間をつくる

荒井恵子さんが制作のパートナーとして大切にしてきた素材「和紙」と「墨」。和紙についていえば、かつては日本家屋の空間に当たり前のようにあった襖や障子も、今は必ずしも身近なものとはいえないでしょう。そこで荒井さんは、暮らしの中で出会う和紙として障子紙に注目し、そのしなやかさを体感することができる仕組みを用意しました。また、墨といえば墨汁しか使ったことのない子どもも多い昨今、硯を使って固形の墨を磨る体験は、参加者の心に様々に響いたようです。
ここでは、会期中に用意された二つのオープンワークショップと、六つのプログラムについて報告します。

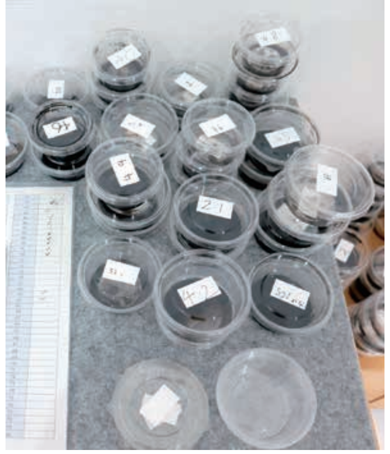
オープンワークショップ

「墨に出会う」

会期中毎日｜参加者＝のべ1,882人

「墨でつながるプロジェクト」(p.5を参照)の呼びかけに応じて、皆さんからゆずっていただいた墨を使い、硯で磨る体験を用意しました。墨の香りを感じ、和紙への試し描きを通して、描き心地や墨の色味のバリエーションを味わいました。

左：墨液が入った透明な容器。
色味の違いが分かります。
右：一つ一つ、香りが異なります。



オープンワークショップ

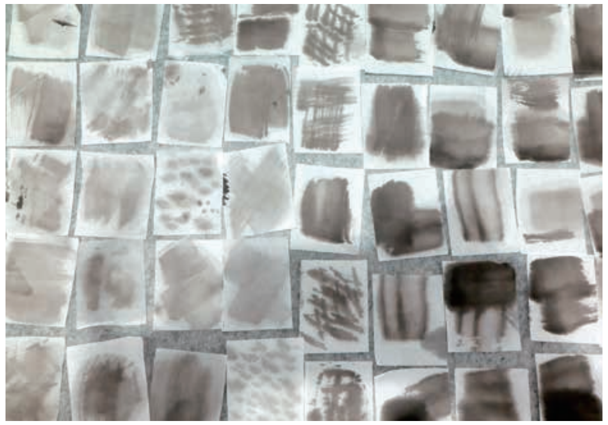
「和紙に触れる」

会期中毎日｜参加者＝のべ3,981人

指先で障子紙（和紙）に触れ、その強度を体感した後、水をつけた指で穴を開けてみることで、そこから覗く和紙の繊維の手触りを味わいました。他の来場者が試し描きに使った紙を乾かして再利用し、水切りをして紙片をつくり、障子紙に開けた穴を塞ぐところまでを一連の体験としました。穴を塞ぐ紙片が増えていくにしたがって、ちゃぶ台の周りに立てられた障子は白から黒へ、色合いを変えていきました。

白から黒へ。照明も変えることで、雰囲気が大きく変化しました。（写真左は会期初め、同右は会期最終週の様子）

墨を磨るブースを隔てるのは、岩野平三郎製紙所の手漉き和紙です。



試し描きをした和紙は乾かし、開けた穴を塞ぐために使います。

アーティストワークショップ

「障子張り体験」

2月4日［日］講師＝荒井恵子｜参加者＝20人

会期に先立ち参加者とともに行った障子張り。障子は和紙を身近に感じられる日本古来の建具ですが、最近では見かけない家もずいぶん増えました。障子の張り替えに至っては、なかなか経験する機会も無いでしょう。張り替えたばかりの真新しい障子は、会場の中心に立てられ、和室を模した空間をつくりだしました。

寒い季節に屋外で行うことの多い障子張り。経験者からは、水の冷たさなどを思い出すという声も。張り替えれば新品になる障子は、繰り返し使うことができる建具です。

アーティスト・パフォーマンス

「和紙と墨 表現と公開制作パフォーマンス Danse des matériaux 2024」

2月18日［日］出演＝荒井恵子｜参加者＝75人

大判の手漉き和紙をスクリーンに見立てて、美術館1階のさや堂ホールで公開制作を行いました。様々な筆を使い、水や墨が和紙の上に広がっていく様子が、スクリーンに大きく投影されました。

アーティストワークショップ

「漉き返し体験～再生和紙をつくろう」

4月6日［土］講師＝荒井恵子｜参加者＝45人

オープンワークショップ「和紙に触れる」で出た和紙の端材等を再利用し、漉き返しという昔ながらの技法を体験しました。漉いた和紙は、窓ガラスに貼り付けて乾燥させました。

たくさん集まった和紙の端材を広げてみます。

美術館で育てたトロロアオイも、原料の一部として加えました。

漉き返しに使ったのは、網戸用の網。端材を細かくちぎって水に溶かし、ねりを加えて原料をつくり、流し込んで、好きな形をつくります。

水気を切って、窓ガラスに貼って乾かしたら、再生和紙の完成です。

アーティストワークショップ

「墨磨り座禅会」

4月12日［金］講師＝荒井恵子｜参加者＝9人

坐禅を組むようなイメージで、静かに墨を磨る行為へと集中していくプログラム。墨を磨っているあいだの心の感覚に意識を向けると同時に、墨特有の香りや質感、磨る際に響く音、磨り終えた墨色の違いを見比べるなど、五感を使って墨を味わいました。

アーティストワークショップ

「墨玉から墨づくり～墨の話」

4月21日［日］講師＝荒井恵子

協力＝株式会社 墨運堂｜参加者＝52人

奈良から墨づくり職人を招き、墨をつくる工程や、必要な材料、道具などの話をお聞きしながら、生墨を練り上げるプロセスを見学しました。練り上がった生墨を参加者一人一人が握り、その温度や感触を味わい、和紙に包んで乾燥させました。

トークイベント

「『和紙のフトコロ 墨のダイゴミ』を振り返る──空間の変化をたどって」

5月25日［土］出演＝荒井恵子、

山根佳奈（担当学芸員）｜参加者＝11人

3ヶ月余りの間に空間がどのように変化してきたのか、会場内を巡りながら振り返りました。

「和紙」と「墨」をめぐる出会いとつながり

本物の和紙と墨に触れてほしい、本物の素材に出会う機会をつくりたい。その気持ちから始まった今回のプロジェクトでは、荒井さんを通して、いくつもの貴重な出会いや温かいサポート、そしてゲストとしての関わりがありました。ここでは、荒井さんのこれまでの活動の中で育まれ、今回のプロジェクトへとつながっていった、「和紙」と「墨」をめぐる人と人との豊かな関わりと、そこから生まれた成果について報告します。

「荒井さんと訪ねる 和紙づくりの現場」

2023年3月

プロジェクトを1年後に控えた2023年3月、荒井さんと福井県越前市の越前和紙の制作現場を訪ねました。紙漉き職人の岩野市兵衛さんには制作の現場をご案内いただき、和紙づくりについてのお話しをうかがいました。また、岩野平三郎製紙所では大きな和紙ができるまでの工程を取材させていただきました。取材内容は映像にまとめ、会場で紹介しました。映像でも紹介した大きな和紙（七・九判 212×273mm）は、さや堂ホールでのパフォーマンスの際にスクリーンとして登場しました（p.4を参照）。

岩野市兵衛さんは人間国宝（国指定重要無形文化財）に認定された紙漉きの職人。今回のインタビューでは、実際に漉いた和紙を見せていただきながら、強さとしなやかさの秘密である繊維のことや、原料となる楮や大切な水のことなどをうかがいました。

岩野平三郎製紙所は150年をこえる歴史を持つ手漉き和紙の会社。大きな和紙をつくることを特徴としています。

「墨でつながるプロジェクト」

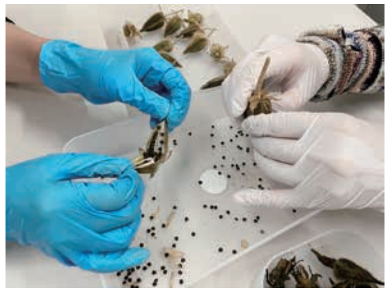
2022年11月～会期中

「ずいぶん前に使ったきりどこかで眠っている、そんな「墨」に心当たりのある方は、ぜひ美術館にお持ちください。」という荒井さんからの呼びかけとともに、館内2箇所に「墨ボックス」を設置しました。たくさんの墨をお持ち寄りいただき、オープンワークショップ「墨に出会う」（p.2を参照）で活用させていただきました。

「SEEDプロジェクト」

2023年4月～2025年3月（予定）

荒井さんが取り組んでこられた、和紙づくりに欠かせないトロロアオイ（黄蜀葵）を育てて種を採り、次の世代へとつなげていくプロジェクト。2023年の初夏に荒井さんからいただいた種を、美術館の職員やボランティアスタッフが持ち帰り、また美術館のベランダでも栽培し、種を採りました。その種を、今度は会期中来場者の皆さんにお持ち帰りいただきました。2024年の夏に採れた種は、美術館にお持ちいただくことで、荒井さんを通してさらに多くの人のもとへと広がっていくことになります。



映像（3種）は、こちらからご覧いただけます。

障子と大きなちゃぶ台

会場の真ん中に障子で囲まれた和の空間をつくりたい。会場の設えは、そんな荒井さんのアイデアから始まりました。大きさも様々な障子は、使わなくなった障子を、何人かの方から荒井さんが譲っていただいたものです。中央に置かれた大きなちゃぶ台は、荒井さんのご実家で使われていたものですが、会期中は、水切りをする作業スペースになっただけでなく、周りに座っておしゃべりをしたり、この空間の主役ともいえる存在でした。

トークイベント「『和紙のフトコロ 墨のダイゴミ』を振り返る――空間の変化をたどって」の様子。参加者も一緒にちゃぶ台のまわりを囲むように座り、3ヶ月余りのプロジェクトを振り返りました。

アーティスト・プログラム「ちゃぶ台トーク」

会期中不定期開催（19回）
出演＝荒井恵子、
ゲストの皆様（15人※最終回を除く）
ポッドキャスト再生回数1,499回（2024年9月現在）

和紙と墨に関わるテーマで様々なゲストを迎え、ちゃぶ台の周りに座って荒井さんとのトークを展開しました。収録した音声は、ゲストの承諾を得て美術館のポッドキャストで公開しました。初回は開幕から10日後の2月24日に2回行われ、3月に8回、4月に4回、5月に5回、#00から#18までの合計19回のトークが開催されています。

荒井さんがこれまで一緒にお仕事をされた美術関係者、「墨でつながるプロジェクト」の参加者、書道の先生や愛好家、水墨画家、つくりかけラボを訪れた大学生といった外部の方々だけでなく、浮世絵からデザインまで様々な専門分野から千葉市美術館のスタッフも出演しています。また、岩野平三郎製紙所の4代目社長・岩野麻貴子さんが福井から訪ねてくださった折には、展示された製紙所の大きな和紙を前にして、手漉き和紙の未来に想いをはせるトークとなりました。最終回は会期終了後、撤収作業の合間に運営スタッフが勢揃いする中で、プロジェクトを振り返りました。

各回のトークは、こちらからお聴きいただけます

＃00 「つくりかけラボはじまりました」
＃01 「荒井さんのこれまでとこれから」
＃02 「つくりかけラボはこんなところ」
＃03 「紙漉き唄と紙の神さま」
＃04 「墨の黒っておもしろい！」
＃05 「浮世版画の墨と紙」
＃06 「松煙墨（ショウエンボク）の話」
＃07 「書道教室の小さくなった墨の話から」
＃08 「荒井さんの似顔絵描いたの、だあれ？」
＃09 「和紙って何でできてるの？」
＃10 「油彩にはできないこと、和紙と墨ならではの表現とは？」
＃11 「トロロアオイの話～SEEDプロジェクトへのお誘い」
＃12 「張る／漉く／磨る／握る 4つのワークショップについて」
＃13 「越前からのひろがりつながり」
＃14 「常設展示室でコラボ開催中！」
＃15 「紙漉き唄をもう一度」
＃16 「和紙に囲まれた暮らし」
＃17 「和紙をつくるお仕事」
＃18 「どんなプロジェクトでしたか？」

ちゃぶ台トークの様子（＃01）

滞在制作とラボで生まれた作品について

会場の右手奥には、荒井さんの制作スペースがつくられました。荒井さんは会期中の金土日を中心に滞在され、会場の変化に呼応するように、いくつかの作品が生まれています。

4月6日のワークショップで作った再生和紙は、その後、モビールとして生まれ変わりました。写真上から2点は荒井さんによる大型のモビール。下は、ロビーに設置された体験用のモビールで、パーツを付け替えることによって紙の重さや手触りを楽しむことができました。

会期後半には、「百の墨」を荒井さんと一緒に磨る墨磨りサポーターが制作スペースに立ち寄り、墨を磨りました。

「和紙のフトコロ墨のダイゴミ」を終えて

この度の「つくりかけラボ」では、幅広い世代の来場者と共に、和紙と墨の魅力を様々な角度から体験でき、とても有意義な時間となりました。そして、それらにとどまらず、持続可能な取り組みにも目を向けることができました。障子や墨を再活用したり、不要になった和紙を漉き返しにより蘇らせたりと、盛沢山のワークショップも行いました。週末はラボ内にアトリエを移して制作していたため、制作過程も垣間見てもらえたのではないかと思います。

一方で私自身も多くの気づきが得られました。ちゃぶ台の空間では様々な世代の方と交流ができ、特に学生方との会話は新しい視点と刺激をもらえ大変印象的でした。ゲストを迎えてのちゃぶ台トーク（ポッドキャスト）も、直径130cmの円形の距離感だからこそ、和んだ会話になったのだと思います。また、日ごろ使っているアトリエとは異なる空気、光、音などの環境下での制作は大変面白く興味深いものでした。冬から春、そして新緑の5月までの期間を経て、湿度、温度の変化で、墨が和紙に染み込んでいく時間が日に日に変わっていくことを感じました。そしてそれらは貴重な気づきとなり、新しい作品が生まれました。

こうして、この「和紙のフトコロ墨のダイゴミ」は、ラボを経由し、さらなる地へ繋がるはずです。世代を超えて、これらの体験が広がっていくことを願いつつ、日常のアトリエに戻り、改めて墨を磨りながら未来に想いを巡らせています。これからも和紙の懐に包まれ、墨の醍醐味を味わいたいと思っています。　荒井恵子

荒井恵子［あらい・けいこ］
東京都生まれ、千葉県船橋市在住。墨と和紙を使った水墨表現に取り組む。近年の主な展覧会に「白と黒の間」（ふなばしアンデルセン公園子ども美術館／千葉、2022年）、「荒井恵子 船橋三部作――宝成寺・三番瀬・玉川」（船橋市民ギャラリー／千葉、2021年）、「One Hundred Shades of Grey」（The Storrier Stearns Japanese Garden／ロサンゼルス、2019年）、「いろいろのいろ墨のいろ――荒井恵子と子どもたち」（富山県水墨美術館／富山、2019年）など。また、岡太神社大滝神社千三百年大祭記念事業「荒井恵子の世界 墨と和紙そのあわい」（越前和紙の卯立の工芸館／福井、2018年）では襖絵「起承転結」奉納。新たに映像や写真の表現にも幅を広げ活動している。

つくりかけラボ14
荒井恵子｜和紙のフトコロ　墨のダイゴミ

会期
2024年2月14日［水］－5月26日［日］

主催
千葉市美術館

協力
岩野市兵衛
岩野平三郎製紙所
越前和紙の里 卯立の工芸館
—
株式会社 中里
株式会社 墨運堂
丸山表具店
—
株式会社KAURI
藤田畳店
堀越美優
—
トロロアオイの種を育ててくださった皆様
墨、硯を提供してくださった皆様
—
千葉市美術館ボランティアスタッフ

写真提供
ゆう

ゲスト
岩野麻貴子
木村由夫
白井孝
奈良本真紀
森下真弓
安永尚生
山本雅美
—
西原如歩（株式会社ニニギ）
荒井美帆

滞在制作
2月14日［水］、16日［金］、17日［土］、
18日［日］、23日［金・祝］、24日［土］、25日［日］
3月1日［金］、2日［土］、3日［日］、8日［金］、
9日［土］、10日［日］、15日［金］、16日［土］、
17日［日］、22日［金］、24日［日］、29日［金］、
30日［土］、31日［日］
4月5日［金］、6日［土］、7日［日］、12日［金］、
13日［土］、14日［日］、19日［金］、21日［日］、
26日［金］、27日［土］
5月3日［金・祝］、4日［土・祝］、5日［日・祝］、
10日［金］、11日［土］、12日［日］、17日［金］、
18日［土］、19日［日］、24日［金］、25日［土］、
26日［日］

来場者数
3,969人
（大人3,420人、高校生65人、中学生以下484人）

つくりかけラボ14
荒井恵子｜和紙のフトコロ　墨のダイゴミ

執筆
荒井恵子、山根佳奈

撮影
株式会社 総合印刷新報社

デザイン
木村稔将

表紙フォーマット
加藤賢策（LABORATORIES）

印刷
吉原印刷株式会社

編集・発行
千葉市美術館

発行日
2024年10月24日

「素材にふれる」をテーマとした今回、荒井さんは、ご自身の制作において最も身近なところにある和紙と墨という二つの素材の特性や魅力を、ラボを訪れる人々が体感できるように、様々なアプローチを用意してくださいました。会場につくり出された和紙と墨の空間は、味覚を除く私たちの感覚全てに訴えかけるものとなりました。
もう一つ、準備を進めていく中でテーマとして見えてきたのが、「つながり」という言葉でした。開催にあたっては、使わなくなった障子や墨、トロロアオイの種などを介してプロジェクトにご協力いただいた方々の存在があります。荒井さんを通して、手漉き和紙づくりの現場を取材させていただくことができたのも、大変貴重な経験でした。「ちゃぶ台トーク」には、そのような方々の中からのゲストに加えて、担当学芸員以外の美術館職員も参加し、和紙と墨をめぐって、荒井さんとの興味深いやりとりが展開されました。この空間をつないできた人々やもの、出来事を振り返りながら、片付けを終えてみれば、廃棄されるものはほんの少しだけ。持続可能な事業のあり方への問いかけともなったプロジェクトでした。
荒井さんにとっては単なる素材（画材）ではない和紙と墨ですが、「制作のパートナー」という表現が本当にぴったりだと思う場面に、繰り返し立ち会うことができたのは、私にとってとても幸せなことでした。和紙や墨の語りかける声に耳を傾け、対話をするかのように向き合いながら作品を生み出していく荒井さんの誠実さ、しなやかさは、ラボでの人々との出会いにおいても変わらないものであったと思います。　［千葉市美術館 学芸員 山根佳奈］